

住民による農村活性化の方策を探る

生物資源科学部 アグリビジネス学科

1年 佐藤 志哉

1年 藤根 裕太

1年 堀内 美沙希

指導教員 生物資源科学部 アグリビジネス学科

教授 荒樋 豊

1. 研究目的

現在、日本の農村は多くの問題を抱えている。代表的な問題として高齢化や過疎化があげられる。この問題の解決策の一つとして、農村活性化という取組があげられる。農村の衰退を救うためには、この取組が重要になってくる。

本研究で、私たちは、農村社会が持っている多様な魅力的資源を探し出し、その活用法策を探ることを通じて実践可能な農村活性化に寄与することを目的としている。秋田県内の複数の農村に出掛け、それぞれの特徴的な資源を発掘し、住民と協議しながら、それらの活用法を考える。そして、この研究を通じ、多くの情報を得て、現実的な活性化イメージを考え、農村活性化の取組をどう進めていくべきかを検討したい。

2. 方法

秋田県には多くの農村がある。その農村に休日を利用して訪問し、住民の方々と交流を図る。また、農村活性化に関する考えを住民の方々から聞き取るとともに、自らの目で農村を観察することで問題を発見し、現状の把握を試みる。

主な調査対象として、三種町上岩川地域での朝市等の地域づくり実践、能代市常盤地域での地域資源活用の取組、大仙市大曲地域での農家民宿等のグリーン・ツーリズム活動を取り上げるとともに、秋田県内の地域づくりの多くに関与しているNPO法人「秋田花まるっグリーン・ツーリズム推進協議会」（事務所は秋田市）での聞き取り調査をおこなっている。現地調査および地域づくりの支援組織への聞き取り等により、農村の衰退を救うための各地域に即した多様な農村活性化のあり方を追求する。また、2週間に1回勉強会をおこない、農村活性化への興味・関心、知識を深める。

3. 調査活動

キャンパス内で、2週間に1回程度の頻度で、勉強会を開催しながら、「地域コミュニティづくり」や「グリーン・ツーリズム」などに関する文献を読み、知識を深めた。また、各地域への訪問のための行動計画を立て、休日を利用して、各地域に訪問し調査をおこなった。訪問先と活動内容は次の通りである。

○調査の日程と内容

8月6日	上岩川地域：「朝市活動」 お母さん方との交流
8月19日	常盤地域：「常盤川ふれあいイベント」 参加者との交流
9月3日	上岩川地域：「地域生活実態把握」 お母さん方との交流
9月10日	常盤地域：「訪問者交流」 地元の散策及び川遊びへの参加
10月28日	大曲地域：「GT 協議会のイベント参加」 農家民宿での宿泊体験
12月3日	上岩川地域：「農村喫茶・朝市活動」 お母さん方との交流
12月26日	NPO 秋田花まるっグリーン・ツーリズム推進協議会での聞き取り調査

4. 調査・研修報告

1) 訪問先の地域づくり実践の特徴

①上岩川地域での朝市見学

上岩川地域には、3回訪問し、お母さん方の活動を見学させていただいた。活動内容として、地元のお母さん方が主催する朝市及び交流喫茶店活動の見学である。

朝市は、「日本一小さい朝市」として毎月第一日曜日に上岩川交流館において開催されている。経営は、房住里の会という地域づくりグループのお母さん方が行っている。名前にあるように、とても小規模な朝市ではあるが、とれたての農産物やお母さんの手作りおやきやマドレーヌ、そして「上岩川地鶏」と称した鶏肉などが並んでいる。地元の高齢者を主な顧客としているが、能代市や八峰市から訪れる人もいる。この朝市は月1回の開催であるが、同じ施設を使用して毎週日曜日に喫茶店も経営している。この喫茶部門の主なメニューは椎茸うどん定食であり、その利用者は朝市のお客のほか、町が開催している「クアオルト」というウォーキングプログラムへの参加者も含まれる。

朝市や交流喫茶店のような活動は、上岩川地域住民に大きな影響を与えている。お母さんたちの取組は地域の農産物販売等を目的としているが、利潤を求めているのではなく、訪れた人との交流により関心を置いている。地域住民や外部からのお客たちとの交流に重点をおき、みんなが楽しみながら集まることで、地域づくりへの興味が高まり、それぞれ自らが生活を楽しく豊かにしていくという効果が発揮されている。多くの女性の力でコミュニティづくり、魅力づくりが進められている。女性たちが無理のない程度でそれぞれの役割を担い、お菓子づくり、農産物づくり、うどん販売などの取組を行っている。

上岩川地域は、お母さん方による朝市での農産物販売や喫茶店などの取り組みであったが、地域住民の新たな集まり場所になっている。また、この女性たちの活動は、農村のコミュニティを支える役割を果たしている。

②常盤地域での交流

常盤地域は能代市の西部に位置し、自然豊かな農村である。我々にとって農村体験できる場所であった。普段そんなに自然と触れ合う機会のない私たちにとっては目新しいもの

に見えた。以下に訪問者を迎え入れる交流イベントの一つに参加した。その様子を記す。

常盤川では、網を張って鮎などの川魚を捕まえた。川魚を網を張ってとったことのある人は少なく、網の仕掛け方から、魚の追い込み方、また、網の片付け方まで、初めてやることばかりだった。地域周辺を歩いて散策もして、地域の魅力を感じることができた。これが多くの参加者の共通の感想であった。常盤は、なにか新たに施設などを増やして人を呼び込むのではなく、今あるものを活かして魅力を見出していた。

参加者は親子連れだったり地域のために動いている人だったり、そこで初めて会う人同士も多く、そこから交流の輪も広げることができる。一緒に自然を体験したり、バーベキューでは捕まえた魚を焼いて食べたりすることでより交流も深まるだろう。

この交流イベントは、子供のいる家族にとっていいイベントだろう。その地域がどのような場所なのかも分からず住んでもらうことは難しいので、まずは遊びに来てくれるということはいい流れが生まれることに繋がるだろう。

③大曲でのイベント参加（農家民宿での民泊体験）

秋田花まるっグリーン・ツーリズム推進協議会という組織が秋田県に存在している。この組織が主催する「秋田グリーン・ツーリズムまるごと体験研修」に参加した。大仙市の農家民宿「季節の郷」での宿泊体験である。二日間に渡って農作業体験、秋田県立農業科学館の見学、農産物販売所「しゅしゅえっとまるしゅえ」の訪問を行った。

農作業体験では、いものこや大根の収穫作業のほか、冬に向けた農作業の一部を体験した。農家の方は少ない人数で作業をするのは大変だと言っていたが、参加者は楽しんで作業をしている様子であった。辛い作業でも、普段農業に関わる機会のない人なら楽しんで行うことができ、農家の方にも参加者にもメリットがある、いい関係が築けると感じた。作業をしたり一緒に食事をしたりする中で、農家の方からたくさんのお話を聞くことができた。農業や地域の魅力のほか、後継者不足や耕作放棄地の増加などで地域の農業が衰退している現状についても詳しく話していただき、参加者は真剣に聞いていた。

このように良いことも悪いことも正直に伝えることは、グリーン・ツーリズムに興味を持って参加している人に、より関心を持ってもらうことに繋がるのではないか。

④NPO法人「秋田花まるっグリーン・ツーリズム推進協議会」での聞き取り調査

「秋田花まるっグリーン・ツーリズム推進協議会」は、秋田の農村の魅力を多くの人に知ってもらうことをモットーに活動している。農村活性化をおこなうためのきっかけづくりをしていると言っても過言ではない。この協議会は、農村の魅力を具体的に発信することを目指して、「秋田花まるっグリーン・ツーリズム大学」事業を開催するとともに、魅力が伝わるようなツアー企画を実践しながら、人材育成を図っている組織である。

第1にグリーン・ツーリズム大学をみると、主要な教育方針は次の点にあることが感じられた。すなわち、一人勝ちするのではなく受け入れ農家と地域社会と一緒に発展することを目指していること。そのために、グリーン・ツーリズムを介して地域間の協力関係を築いていくことが大切であるということである。また、農業体験の教育旅行を受け入れて

おり、学生や海外の富裕層を受け入れている。このようにいろんな人を受け入れて農村や農業を体験してもらうことは、少しでも地域農業に興味をもってもらえるきっかけになるのではないだろうか。

第2に農村体験ツアー企画をみる。この協議会で企画されているものは、他県から来てもらうようなものではなく、県内の人から来てもらえるような日帰りツアーのようなものが一般的のようである。県内の人が多く参加するようになれば、他県から見て面白そうだと思うてもらえ、来てくれるようになるかもしれない。うまくゆけば、地域にも活気が出て新たな雇用先も生まれるだろう。さらに、雇用先が生まれれば、新たに移住してくる人にも収入面の安心感を与えられるだろう。また、ツアーを実施することによって、外から人を受け入れるための訓練になり、地域住民の多くが手伝うことで交流の輪も広がる。このような流れができれば地域活性化につながる。

「秋田花まるっグリーン・ツーリズム推進協議会」は、地域に何度も足を運び、地域住民との話し合いをおこない、住民と一緒に地域の魅力を探している。国や県のかわりに親身になってサポートしており、行政と地域をつなぐ重要な役割を担っている。

5. 考察

私たちは、農村活性化の取組をどう進めていくかを考えるため、現実の地域づくりの実態を知ることから、本研究を開始した。そして、次の考えを持つようになった。

農村活性化は、そこに住む地域住民自らが地域の魅力に気づき、行動を起こすことが大切である。私たちのような外部の者もそれに貢献できる。私たち学生の積極的な意見や感想が地域の持つ魅力について気づきを促すことになるのではないかということである。

私たちのような学生にもできることがある。一つは、地域の持つ魅力を地域住民に伝えることである。もう一つは、行動に移すためのサポートである。どのような工夫と支援をしたら多くの人に魅力を伝えることができるのかについて学生の立場で考えてみたい。これらのことが農村活性化を行う上で一番に考えなければいけないことであると考えた。

○学んだこと

今回の自主研究では、たくさんの地域に訪問したり、協議会に聞き取り調査におこなったりと、普段自分たちでは経験できないことを経験することができた。活動当初は農村活性化について漠然と研究したいと少し軽く考えていた。だが、勉強会や調査・研修を重ねていくうちに、みんなが最初抱いていた農村活性化のイメージとは異なるものであることに気づき始めた。イベントを行えば農村活性化になるだろうと思っていたが、そんなに簡単に活性化には活性化に結び付かないことを知ることができた。ほかにも、いろんな地域の方と交流していくなかでコミュニケーションの大切さを確認した。コミュニケーションがないと他者に地域の魅力を伝えることができない。この研究を通してこんな根本的なことを考えさせられた。